

③「インタビュー」 局長の決意

当時の佐々木五郎環境事業局長(平成17年度から資源循環局長)の任期の終わり(平成19年3月)にあたり、資源政策課の担当者が「横浜G30プラン」推進についてインタビューしている、ここでそれをご紹介したい。

「横浜G30プラン」が発表された3か月後の平成15年4月、佐々木市民局人権担当理事が環境事業局長(当時の局長、平成17年度から資源循環局長)に就任した。佐々木局長にとつて、「ごみ」は、全く初めての分野であった。

早速、各課から事業の説明を受けたが、「30%のごみ削減なんて無理」というのが当初の局内の雰囲気であったという。

——環境事業局長になって、初めて、「ごみ量30%削減」というG30の話を聞いたとき、どのように考えましたか。

【佐々木】 誰に聞いても、「ごみ量30%削減なんて、無理だ」と言う状況だった。しかし、あまりに「無理だ」と言うのを聞いてみると、人間、欲が出てくるもので、「何とか達成して

いかなければならない」と思った。とにかく、「ごみ量の30%削減が、できるか、できないかを考えるのではない。やるしかないのだ。ごみを出すのは、市民の皆さん。だから、市民の皆さんにどのようにごみ減量を訴えかけるかを考えるべきだ」と思った。

——それから、私は、G30を進めるにあたって、ひとつの方針を決めた。「広告代理店やイベント会社などに任せれば、それなりにきれいな形で『ごみ減量のキャンペーン』もできるだろう。しかし、それでは、職員にとつて、『ごみ減量30%なんて他人事』になってしまう。そこにお金をかけるのではなく、職員が自らが汗をかき、知恵を出し合えるように、すべてを手作りで作ってみよう。職員が動かなければ、市民の皆さんを動かすことはできないし、また、これが、職員の意識改革につながる」と考えた。

——局長に着任されてから、頻繁に、現場の収集事務所を巡回されてきましたが、なぜそのようにされたのですか。

【佐々木】 「現場を見ずして、

モノを語るな」と言うが、まさに、G30を進めるには、「とにかく、現場が動かないとすべては始まらない」と思った。

現場を回る中で、収集に携わる職員が、「今後、自分達の仕事は、どのようになっていくのだろうか」と、漠然とした先行きの不安を持っているのを知った。収集職員の定年退職に対して、新たな補充はしないという方針が出たり、収集作業の民間委託が始まるという噂も広まってきた。

そうした中、現場を回ると、「G30でごみを減らすというのは、自分達の仕事を無くしていくことではないのか」という声を多く聞いた。

そこで、「ごみと資源を分ければ、ごみは減るが、新たに、資源物を運搬しなければならなくなる。つまり、G30に取り組むことによつて、収集運搬に関しても新たな役割ができる。でも、ごみや資源物を運ぶだけなら、民間でできるだろう。なぜ、市の職員がごみの収集をやるのか。ごみを運ぶだけではなく、G30の啓発を行う、市民にごみの減量を訴えかけていく、こういう

市の職員でなければできないことを積極的にやってみなければならぬ」と、繰り返し、職員に訴えかけた。「職員が一丸となつてG30に取り組むことが、局の将来的な方向性を決めることになる。収集職員の皆さんも、ごみを運ぶだけでなく、市民に顔を向けた仕事をすることで、市民の信頼を得ることになり、市民に支えられるようになる。これからは、地域と積極的にかかわりを持つて行かなければならないのではないかと」と何度も繰り返し、現場へと足を運んで、訴えかけていった。

——局長が、現場の収集職員と意見交換を繰り返し、いろいろと訴えかけられているなかで、職員の手ごたえを感じたのは、いつぐらいからですか。

【佐々木】 はつきりとした手ごたえを感じるようになってきたのは、平成15年10月から実施した家庭ごみの分別品目拡大のモデル事業が始まるころだったと思う。

まず、モデル地区について、収集事務所が自らの責任で選

プロフィール

佐々木 五郎
前資源循環局長

定しなければならぬ。そして、モデル地区に住んでいる市民の皆さんへの説明と続く。「なぜやらねばならないのか」「どのようにやるのか」そして、「結果はどうなったのか」を、一貫して現場の収集事務所が主体となって、地域の皆さんに説明し、協力を得ていかななくてはならない。その中で、はつきりと、収集職員の皆さんの意識の変化と頑張りを感じることができた。

その結果、モデル地区では、30%以上のごみ削減となり、思わず、「ヤッター」と叫んでしまった。そして、「やれば、できるじゃないか」と思った。

——分別品目拡大のモデル事業では良い結果が出ましたが、その1年後（平成16年10月）の先行6区での実施、そして、平成17年4月からの全市域での実施においても、同じような結果が出ると思っていましたか。

【佐々木】 6区で行ったときは、さすがに、モデル事業のと同じ結果が出るとは思わなかった。

ただ、それまで、モデル事業で得た様々な経験を、現場の職員が積極的に取り入れ、進化していたので、ある程度できるのではないかと期待もあつた。

例えば、「分別を分かりやすく説明するには、市民と直接会って、実物を見せながら説明するのが一番」といった教訓から、たくさんの「分別品目グズ」を作成し、ローラー作戦で、地域に足しげく通うようになるなど、モデル事業の経験が、6区での実施、さらには全市展開へと結び付いた。

結果もそういつた現場の頑張り、市民の皆さんの協力が現れたものだと思つた。

——当初、「ヨコハマはG30」の文字を、至るところに掲示するなど、「G30」の取組の多くが職員による「ローラー作戦」だったように思いますが。

【佐々木】 G30の広報、普及啓発、すべてが「ローラー作戦」だった。市が出す全ての印刷物に「ヨコハマはG30」、ごみ収集車からも「G30」、朝の駅頭にも、職員が立つて、「分

別が始まります。よろしくお願ひします」まさに、シャワーのような広報・啓発ができたと思う。また、それらを、すべての職員が行つた。これによつて、普段は外に出ない事務を担当している職員も、現場に立つようになった。最初は、現場に行くのをためらう人も多かつたが、戻つてくると、「行つてよかつた」と言う。まさに、「現場を見ずして、モノを語るな」だ。これによつて、局内も、いい雰囲気になつてきたと思う。

——市民の皆さんの声を聞く中で、「G30は、市の『本気』を感じたから、それに賛同した」という声を多く聞きます。

【佐々木】 確かに、G30に『本気』で取り組んだことが、相手に伝わることで人を動かし、そして、その輪が広がつてきたと思う。

G30のテーマソング「いいね！横浜G30」についても、職員がいぎなり横山剣さん（クレイジーケンバンドのリーダー）に電話して会つてもらい、話をする中で、本気を感じて

くれたのだらうと思う。また、モーニング娘。が全くの無償のボランティアでG30の広報大使として協力してくれたり、どんどん輪が広がつてきている。

この世の中に、ごみと無縁の生活を送っている人はいない。ごみは、すべての人に係わるから、取りかかりやすいというのがある。楽しく取り組むというのが、ひとつのポイントだと思う。

——最後に、局長の一言をお願いします。

【佐々木】 やれることをどんどんやつて行つたら、思わずできてしまった。また、それによつて、職員も市民も自信を持ち、さらに新たな取組に広がつてきている。分別を覚えてたから良いというのではなく、これからは、ライフスタイルの問題になつていくと思うけれど、良い結果が出るともつと楽しくなるし、広がりも出てくる。やればできるのだ！